

箱崎が変わる!!

● 宮崎宮放生会特集!!

● ワークショップ9月8日

● 福祉講演会は9月21日

箱崎まちづくり新聞

発行者 箱崎まちづくり協議会
 事務局 箱崎公民館内
 電話 651-7708
 ファックス 643-0044
 印刷所 国崎美峰堂

箱崎といえば、放生会。放生会は、箱崎の人々にとってやっぱり特別な存在です。「放生会は、箱崎の人たちにとって、生活のリズムであり節目。私たちには放生会の匂いが身に染みついている。」とおっしゃるのは、箱崎に代々生まれ育った古田鷹治さん。いまでも、鐘太鼓の音を聞くくと、身震いされるそうです。

放生会までには、正月野菜の種をまく、障子や畳を替える。そして、放生会を境に、着物は夏物から単衣に、というのが

甘酒を作り、がめ煮や蟹を用意し、お客様を迎える準備に大忙し。障子、畳替えも、このような準備の一つだったそうです。まさに、放生会は、箱崎住人にとつ

点はやはり生きとし生けるものを哀れむ「放生」にあることを今一度確認し、若い人に教えるのも年寄りのつとめではないかと、年輩者はおっしゃいます。

のの哀れを説かれたのだそうです。たとえば、トンボをとって帰ったとき。昔は、盆過ぎにもなると箱崎のあちこちにトンボが乱舞し、子ども達はトンボ取りに夢

いよいよ今年も管崎宮放生会 御神幸は、9月12日(お下り)と14日(お上り) 箱崎住人なら、放生会を100倍楽しもう!

今年二年に一回の御神幸
 今年も、いよいよ放生会が始まります。「万物の生命をいつくしみ殺生を戒める」神事として宇佐八幡宮に始まったといわれる放生会は、九百十九(延喜十九)年にはこの箱崎の地でも開かれるようになったそうです。例年百五十万人も人が訪れるという管崎宮放生会。今年二年に一回の御神幸の年に当たり、箱崎町内は、大いに盛り上がりそうです。

御神輿は社領六町
 ところでこの御神幸。行列の順序や持ち場など、古くからのしきたりがいろいろあるのを

ご存じですか? たとえば、三つの御神輿を担ぐことができるのは、社領六町と呼ばれるお宮周りの町内(上社家、下社家、宮前、馬場、前川、郷口)の氏子だけ。駕輿丁と呼ばれる担ぎ手は、神宮の装束にも似た白い装束で、しずしずと進みます。

供奉も各町で受け持ち
 御神輿の周りを囲むのは、隨身、小鉢、駒形、賽銭箱など。隨身、小鉢、駒形は子どもたち、賽銭箱は、海門戸三町(海門戸、帝大前、米一丸)、小寺、阿多田、寺中の担当と、それぞれ決まっています。ちなみに、賽銭箱は、お賽銭を入れると、にぎやかに賽銭箱をなら

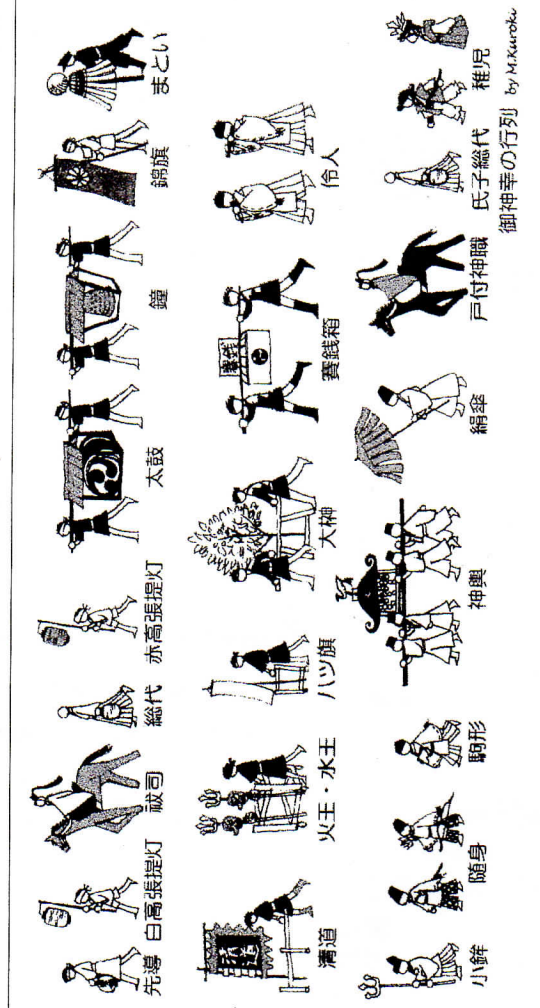
してくれます。試してみたいかがですか?
伶人座箱崎組は一の戸
 御神輿の前で雅楽を奏でるのは、伶人座のみなさんです。管崎宮には、箱崎組、馬出上組、馬出下組の三座がありますが、このうち、箱崎組がつくのは必ず一の戸です。曲目は、「抜頭(ぼとう)」。お祭りらしいテンポの速い華やかな曲を笙、篳篥(ひちりき)、龍笛、打ち物が奏でます

にぎやかな鐘太鼓
 一方、にぎやかに鐘や太鼓をうち鳴らしながら練り歩くのは、海門戸、阿多田、寺中の氏子です。こちらの装束は、黒。放生会の期

秋の夜長 箱崎流放生会の楽しみ方

ての大イベントです。千年以上前からあった放生会。昔も今も子ども達にとつての放生会は、八百メートルの参道にひしめく七百軒の露店そのもの。もちろんそれも間違ったイメージではないけれど、原

春のどんたくや真夏の山笠と比べて、九月の放生会で感じられるのは、やはり「秋の訪れ」と「ものの哀れ」。今のお年寄りが子供の時には、この頃になると、お母さんやお祖母さんたちがしきりにも



先導 日高張提灯 鼓司 祓司 総代 赤高張提灯 太鼓 鐘 錦旗 まとい
 清道 火王・水王 ハツ旗 大榎 神輿 綯傘 戸付神職 氏子総代 稚児
 小餅 隨身 駒形 御神幸の行列 by Mikuroku

中になったとか。籠
 いっぱいトンボをとつ
 て帰ったときの年輩
 の方達の言葉は、
 「ほよ、放生せんな」。
 そんなとき、子ども
 達は、トンボを手
 取り、「ほーうじよ
 う」「ほーうじよ
 う」といつてから、トン
 ぽを放したのだそう
 です。今でも、放生
 会になると、アセチ
 レンの匂いや鐘太鼓
 の音とともに、年輩
 の方達から説かれた
 「放生の心」を思い
 出し、平和のありが
 たさ、命の尊さを感じ
 じるとおっしゃいま
 す。
 笠崎宮放生会には、
 「放生」の意味の他
 に、五穀豊穡を感謝
 する意味もこめられ
 ているといわれます。
 にぎやかなお祭りを
 楽しむと同時に、命
 の大切さ、平和のあ
 りがたさ、そして、
 豊穡に思いをはせる
 のも、箱崎流放生会
 の楽しみ方かもしれ
 ません。秋の夜長、
 そんな放生会の過ご
 し方はいかがですか？



地域の活動ご存じですか？
箱崎校区母子寡婦福祉会

福岡市母子福祉会は、全国組織母子福祉会の支
 部として、母子福祉法・寡婦福祉法のもとに、
 子どもの健やかな成長、より良い生活を目指し、困つ
 たこと等、是非ご相談ください。
 対象者：母子・父子家庭や両親のいない児童の
 家庭で、中学3年生以下の児童と保護者。
 主な活動

- ・小中学校入学祝金贈呈
- ・校区報告会の開催
- ・母と子の体育大会（市）
- ・母と子のふれあい事業（東）
- ・校区日帰りバスハイクなど

☆☆13年度は、10月に城下町長府と海響館
 バスハイクを予定しています☆☆
 お問い合わせ先
 箱崎校区母子寡婦福祉会
 会長三宅ツ子（651-0072）

間中、早朝から聞こえ
 る鐘太鼓の音は、この
 方達のご奉仕によるも
 のです。また台車に乗つ
 た大榎（おおさかき）を
 引くのは網屋、錦旗、
 纏を掲げるのは消防団
 と決まっています。
お稚児さんは参加自由
 御神幸では、かわい
 らしい甲冑姿やお稚児
 さんたちの姿も見逃せ
 ません。男の子は武者
 姿、女の子はお稚児姿
 で供奉します。こちら
 の方は、参加自由とか。
 お子さんの成長の記念
 に参加してみたいか

がですか？
特別な役割の海門戸
 さて、ご神幸の年は、
 各町内、六月頃から、
 準備に余念がありませ
 ん。采配をふるうのは、
 社領六町では輿丁取締
 と輿丁頭（よちようが
 しら）、鐘太鼓では幸
 領・取締。
 海門戸三町は、一の
 戸の供奉に加え、行列
 の先導とお宮に縁の深
 いお道具の奉仕も務め
 ますが、このような特
 別の役目は、享保年間
 の飢饉でご神幸が途絶
 えようとしたときに、

単独でこれを継承した
 ことに由来するという
 言い伝えがあるそうで
 す。
 五百人を超える氏子
 が参加する御神幸。行
 列に参加する各町内の
 知り合いを探しながら
 御神幸行列をお迎えす
 るというも、箱崎住
 人ならではの放生会の
 楽しみ方かもしれませ
 んね。（資料やお話は
 筒崎亭として土屋の方々
 イラストは黒木美沙さ
 んにお世話になりました。
 ありがとうございます
 ました。）

みんな勝負合わせで
つんのうて来てつつかあさい
道のワークシヨップ
道からまちを考えましょう
（主催 箱崎まちづくり協議会）
9月8日（土）午前10時～午後2時
場所は：箱崎会館
参加申し込みは各町内自治会長または
箱崎公民館 651-7708まで

福祉講演会のご案内
 下記のご通り、福祉講演会を開催いたします。
 多数のご参加をお待ちしています。
 テーマ 「支え合う地域づくり」
 講師 早良区社会福祉協議会 藤光敏氏
 日時 平成13年9月21日（金）午後9時～午後7時
 会場 箱崎会館

まちきょうりょく

まちきょう役員が熱く語る

私にとつてのまちづくり

会長 戸次 義雄

私は、五年前、本協議会が発足当時に、事務局長として会の運営に当り、それ以来、協議会と共に歩んでまいりました。もともと箱崎は、豊かな伝統文化・行事を誇り、宮崎宮の門前町として栄えてきました。抜群の交通利便性のゆえに、マンションやアパートの建設は進んでおりましたが、地域としての独自の展望は

なかったように思います。このような時、箱崎、宮松の住民の永年の願望であつたJR鹿児島本線の高架橋事業が認可されると同時に、周辺の区画整理も着手されることになりました。また、九州大学箱崎キャンパスの西区元岡地区への移転も決まり、更に箱崎商店街の活性化策として「商店街リフレッ

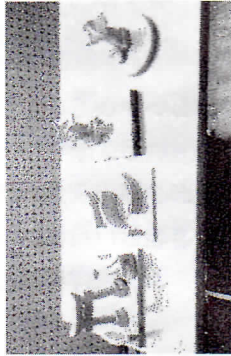
シユ事業」も開始されたのです。このように、まちの開発が一気に進められるのに、地域住民は傍観して良いものであろうかと心配していたところ、当時、箱崎校区自治連合会の桜井会長の主導により地域諸団体や学識経験者を中心とする箱崎まちづくり協議会が設立されたのです。現在では、地域の皆様のご

理解を徐々に頂き、各町内の自治会長を含め、百一名の委員で構成されるほどになりました。活動を始めて、この五年間、住民の意識調査のまとめ、住民によるまちづくり意見交換会、まちづくりの拠点施設の要望書の提出、町内道路の安全チェック、市長と懇談会、校区夏まつりの開催等を進めて参りましたが

二献灯祭

今年の御献灯祭はとにかく好天に恵まれました。なにしろ野外で蠟燭を使うものですから、風と雨は大敵です。でも、主催者の日頃の行いがよかつた(?)のか、一本の蠟燭も消えることなく、見事な

光の回廊ができました。ゆらめく明かりの中に浮かぶ箱崎の街はちよつと幻想的です。伶人座箱崎組が奏でる雅楽の調べに、時間が逆戻りしていくような感覚さえおぼえます。そのせいででしょうか、提灯行列に参加してくれた子どもたちの目も輝いて見えました。(宮崎ま



ちづくり放談会会里透

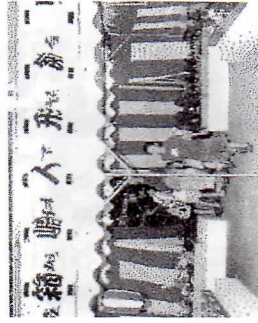
人形の出来映えもなかなかのもの

年々盛り上がりを見せる人形飾り・二献灯祭

式典の中で、まち協

の戸次義雄会長より永年に亘つて人形飾りに貢献されました古田鷹治様(下社家町)と藤野重久様(白浜町)に感謝状が贈られました。

(宮原 茂)



人形飾り

7月23日・24日のお地藏さまの縁日に今年も人形飾りが網屋天神社境内にて行われました。夏の暑さをものともせず二日間で述べ八百名の子も達が線香を手に参加してくれました。箱崎小工作クラブの作品や博多人形師「高野幸博」氏により復元されました「牛若丸と

毎年、箱崎漁協より人形飾りに併せて「大絵燈籠」が飾り付けられ古老の方には懐かしかったのではないでしょうか。

本年、箱崎まちづくり協議会より人形飾りの提灯二対が寄贈され境内が厳かな雰囲気につつまれました。

弁慶」の人形が展示され、多くの人出があり大いに賑わいました。

歴史文化部会 「人形教室」報告

人形飾りが年々盛大なつてきて喜ばしいことですが、残念ながらことに飾りたくても人形が販売されておられません。こういう現状の中で孫のたれに人形を造つて飾りたいという方のために、歴史文化部会事業として本年初めて「人形教室」を7月7日(土)・14日(土)の二日間、博多人形師「高野幸博」様を講師に招いて実施致しました。

18名の参加があり、7日の最初の日には、人形飾りの説明やビデオ鑑賞の後、いよいよ人形造りに挑戦です。高野先生の御指導の下、最初は橋や鳥居・灯籠、次にお宮や藁葺き家、中には亀にチャレンジする

方もありました。あつという間に二時間半の時間が過ぎて、参加者より「これはやみ付きになりそう」「高齢者のケアに「よかばい」とか、「また次回も開催してほしい」と言う声が聞かれました。一日目の14日、前週造つた人形が焼きあがつたのを見て嬉しそうでした。今日は仕上げの絵付けです。講師より絵具の色あわせをしていただいて皆さん悪戦苦闘です。鳥居も赤で塗る人、グレーで塗る人、それぞれに個性豊かな人形が立派に完成しました。

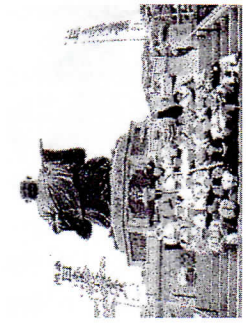


真剣な表情の参加者のみなさん

6月16日(土)、ふるさとに遺る「元寇」に関する史跡を訪ねる歴史探訪を実施した。本年を中世のふるさとと捉え元寇に関わりの深い箱崎・馬出・東公園を対象とした。宮崎宮境内にある様々の元寇史跡、東公園の亀山上皇像、日蓮上人像を訪れ勉強した。近くにある日頃には仲々訪ねることの少ない場所であるため、元寇とは直接には関係はないが併せて箱崎公園記念碑、動物園跡、お綱さんの墓、枯野塚なども廻った。午前中三時間半余りの散策であったが好天に

これからは、まちの将来像を描き出すために問題点の点検と解決策を探る行動を進めたいと計画しております。

そのためには、まちづくり運動への校区住民の参加をもっともっと拡大浸透させる必要があります。住民一人一人が、主人公です。皆様の積極的な参加をお待ちしております。

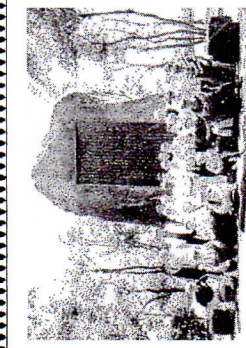


日蓮上人像の前で

も恵まれ、連合会長、公民館長をはじめ約30名の参加者一同は額に汗しながら、七百年の昔を勉強した。宮崎宮から特段の便宜供与もあり、交通安全協会役員のご指導もあつて事故も無く無事終了できたことを喜び感謝に耐えない。高齢参加者に終始マンツーマンで支えていただいた方には頭の下がる思いであった。

今回は初めての企画で反省点もあったが、今後また実施したいと考えている。次回は「元寇と極楽寺」のテーマで10月ごろ宇美方面の勉強会を予定している。御参加の皆様有難うございました。

(井上俊男)
(山口毅)



箱崎公園記念碑前のみなさん

箱崎四方山話 (五)

「幕出」と「幕出し」

お盆がすぎ、九月の声をきくともなれば、残暑厳しいとはいえ、朝夕吹く風には、そこはかとなく秋の訪れを感じる。「梨も柿も放生会」の到来である。

今日では、すっかり秋の風物詩となっている放生会「幕出し」行事は、大正はじめころにはすでに止んでいたそうであるが、昭和四十年代後半に、博多町文化連盟(西島伊三雄理事長)で復活してもう三十年を数える。

何時の頃から始まったかは定かではないが、奥村玉蘭の筑前名所図繪には、すでに当時の模様が描かれているので、幕末には確実にあつたようだ。最盛期は明治中後期といわれ町内や大店単位で九月十二日〜十八日の期間中に約二〇〇組ぐらい出たという。博多から長持ちを担いで石堂橋を渡って宮崎宮へ放生会詣りをするが、箱崎の松原に思い思いに幕を張りめぐらし、その内では酒盛りや踊りなどをして大賑わい。心から楽しんだらしい。博多のレクリエーションの原点ともいわれる。

先年、前、田村名譽宮司から「幕出し」は「まくだし」か「まくで」か、何れが正しい呼び方が調べて欲しいと依頼された。町文連が「幕出し」を復活させたころ、宮司のところへ地元二、三の古老から「自分たちは小さいころ『まくで』と言っていたが・・・」との問合せがあつたらしい。そういえば私の父も少年時代、友達を誘つては「浜の『まくで』ば見げいいこうや」といつて箱崎浜に遊びに行ったというのを聞いたことがある。博多の郷土史家波多江五兵衛先生に、かつてこのことを尋ねた。先輩の話では博多では、はっきり「まくだし」と言っていたということであつた。考えてみれば、つまり博多の人にとっては長持ちを担いで放生会詣りに箱崎に行くのだから能動的に「まくだし」。地元箱崎の人は迎え入れる側で受動的に「まくで」といつても決して不思議ではない。結局「幕出し」も「幕出」も、立場によつて呼び方が異なるだけでどちらの言い方も誤りではないと私は思っている。

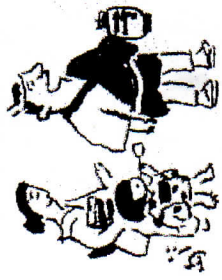
今年も参道に博多長持唄が秋の中空に響くことであろう。今年のご神幸の年。放生会の人の中にあつて、平和の有難さをかみしめ感謝したい。

「そろそろときよるきよると行く放生会」
(薫)

(古田鷹治)



博多町文化連盟のみなさんによる「幕出し」



絵・西島伊三雄氏